

ドイツロマンティークと北歐ロマンティーク

における自然有機体論の差異

——神話理解における「予感」・「憧憬」・「矛盾」の成立をめぐって——

中 里 巧

はじめに

本論文は、ドイツロマンティークと北歐ロマンティークにおける神話理解を比較検討することによって、ロマンティーク思想における主要概念を提示し、おのおののロマンティーク思想における自然有機体論の同質性と差異を、明らかにするものである。ドイツロマンティークと北歐ロマンティークにおける自然有機体論をめぐる同質性は、「予感」概念によって有機的自然を希求していることであり、差異は、ドイツロマンティークが思弁性を基調にしているのに対して、北歐ロマンティークが土着性を基調にしていることである。

1. ドイツロマンティークにおける

神話理解について

——初期シェリング——

シェリングは一七九三年に、『神話について』(*Ueber Mythen, historische Sagen und Philosopheme der ältesten Welt*)において、神話について取り上げて、「あらゆる民族の最古の知識は、神話をめって始まる」⁽¹⁾(*die ältesten Urkunden aller Völker beginnen mit Mythologie*)と言って、「口頭伝承」・「歴史」・「伝統」・「想像力」(*Phantasie*)といった言葉を使いながら、神話について説明している。こうした初期シェリングによる神話概念の

特徴は、哲学における思索の根源を神話に求めていることであり、神話が土着性と不可分であって、自然と一体であった原初の人々が、全存在をかけて、感性を最大限用いて、神話を担ったという主張である。

シェリングによるこうした神話理解を支えているのは、感性に対する積極的評価であって、シェリングは、思考と感性といった二分法を破って、思考よりも感性が優位すると考えて、人間精神の最根源的基層に感性の働きを、見て取ったのである。

神話理解において感性を積極的に評価したのは、シェリング以外にはノヴァーリスである。

——ノヴァーリス——

『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン』(Heinrich von Ofterdingen)のうち、ティークによって編纂された第二部継続に関する遺稿で、ノヴァーリスは、北欧・インド・アメリカ・ギリシアなど様々な民族の神話を、同等に並べて、これを「メルヒェン世界」(Märchenwelt)⁽³⁾という言葉で、呼んでいる。ノヴァーリスの場合神話は、メルヒェンに変容して、そこにおいて相対立する二つの諸事物が結合する場合なのである。こうした理解の背景には、ノヴァーリスのゾフィー体験がある。婚約者ゾフィーの病死以後、落胆したノヴァーリスは、ゾフィーの墓のかたわらにたたずんでいるのがつねであったが、一七九七年五月一三日の夕方突然眼前にゾフィーがあらわれたのであった。

「：あつという間の出来事だった、ゾフィーが近くにいるのを感じる事ができた。ゾフィーは絶えずあらわれているにちがいないと思つた：」⁽⁴⁾と、ノヴァーリスは書いている。ノヴァーリスの関心は、生きている自分と死んだゾフィーとの出会いであり、此岸と彼岸との差異を消失させることであり、そうしたことを永遠に可能にする場を見出すことなのであった。そうした場が、ノヴァーリスにとってメルヒェンなのであるが、ノヴァーリスにおいてメルヒェンは、さらに「ロマンティック」(Romantik)と言い換えられているのであり、神話概念は、メルヒェンという言葉を経由してロマンティック概念に接続するのである。

R・ウッلمانらにしたがえば、Romantik/Romaniker⁽⁵⁾という言葉は、ノヴァーリスが考案して、はじめて本質的意味を与えたのである。ロマンティック概念の本質的意味がノヴァーリスにおいて形成されたのは、一七九四—一七九七年における自然研究期であって、「哲学は根源的に感情(Gefühl)である」と、書いている。この場合感情とは、「予感」(Ahnung)のことであり、予感⁽⁶⁾は自然に関する真理認識であり、他者性を認識する行為である。

——ヤコービ——

こうしたノヴァーリスによる予感概念を理論的に補足する最良なもの、ヤコービの著作『ヤコービからフィヒテへの書簡』(Jacobi an Fichte)である。ヤコービは書いている。「私は、真なるものを知識の前と外にある何ものか、として理解する：理性

よって人間に与えられるのは、真なるものを知的に体系化する能力ではなくて、真なるものについて無知であるという感情と意識、すなわち、真なるものについての予感である。真なるものを提示することは、ひとつの脅迫である。それは、言い換えれば、予感のなかにのみ浮遊してあらわれる真なるものを対象としてあるいは認識衝動の究極の意図として考察することである⁹⁾。

要するに予感とは、述語化不可能な真なるものとの不可避的にかわりのことなのであり、これは、*Ahnung* の語源が、方向・接近・接触を意味する古高ドイツ語前置詞および副詞 *ana* であり、中高ドイツ語動詞 *anen* が、*√ez anet mir* (何か不可解なものが自分におそいかかってくる) と表現されたことから、理解できるのである¹⁰⁾。

——まとめ——

結局、ドイツロマンティークにおける神話理解は、全体としての自然を無差別に有機的に一挙に把握しようとする試みだったのであり、全体としての自然把握に比重がかかったために、日常の経験を超えて、逆に有機的自然に対して他者としてかわることとなったのである。このように、有機的自然を希求すればするほど、その欠乏感に責めさいなみ、そうした欠乏感がさらに有機的自然を希求するという、まさに欠乏感によってかろうじて有機的自然とかわかることを表明する言葉が、ドイツロマンティークにおける「憧憬」(*Sehnsucht*) という言葉なのであった。

2. 北欧ロマンティークにおける神話理解

——ステイフェンス——

北欧ロマンティークは狭義には、一八〇二年一月一日——一八〇三年初頭コペンハーゲンのエーラーズ・コレーギウムで H・ステイフェンスがおこなった哲学講義をもって始まる。ステイフェンスは、スタヴァンガー生まれのデンマーク人であり、一七九八——一八〇二年初夏イエナ留学期にドイツロマン派と接触して、みずからイエナサークルの一員となり、終生シェリングの盟友となった。ステイフェンスにみられる北欧ロマンティークの主要概念は、両極性・個別・予感であり、これらのうち両極性は、ドイツロマンティークからの踏襲であり、予感は、北欧ロマンティーク独特なものに変容されており、個別は、ステイフェンスによってロマンティーク思想にはじめてもたらされたのであった。ドイツロマンティークと北欧ロマンティークとのこうした差異は、それぞれ神話理解の違いから生じたのであった。

興味深いのは、ステイフェンスに神話の重要性を教えたのが、ノヴァーリスだということである。両者は、ともに自然研究者であり鉱物学者であって、フライベルクで会った。ステイフェンスは、自然有機体論という共通の関心をとおして、有機的自然を神話世界と重ね合わせて理解する仕方を、ノヴァーリスから学んだのであった¹¹⁾。

エーラー・ス・コレーギウムにおけるステイフェンスの哲学講義は、九つの講義からなり、第一講義「導入」・第二・六講義「自然哲学」・第七・八講義「歴史哲学」・第九講義「芸術哲学」である。ステイフェンスの主張は、「北欧の原民族」(de nordiske Urdnisc)という言葉を使って北欧神話世界にひとつの理想郷を見て、予感を駆使して実際にその理想郷を体現することであった。ステイフェンスが見た理想郷とは、故郷という具体的環境に根ざした有機的自然であり、外なる自然と人間の営みとが完全に調和した姿なのであった。

——ラグナロク神話——

ステイフェンスの理念は、デンマークロマン派のうちA・G・エーレンスレーアやN・F・S・グルントヴィによって継承されていったが、こうした人々は、決定的な難問に突き当たった。それは、はたして北欧神話とキリスト教の融合が可能か、という点だった。北欧神話世界を実際に具体的環境のうちに体現する以上、過去の宗教である北欧神話を現存する宗教であるキリスト教と融合させることは、不可避であった。しかしながら、キリスト教がイエスの死と復活によって象徴されるように、神による人間の救済や神と人間との和解を主張するのにたいして、北欧神話は、ラグナロク神話に象徴されるように、人間を含めた一切の絶滅を主張する。こうしたキリスト教と北欧神話との融合は、デンマークロマン派にとっては、著しく困難なのであった。

ラグナロク神話は、『エッダ』(Edda)のうち主として『巫女予言』(Völuspá)や『ギルヴィの惑わし』(Gylfaginning)に伝承されている。原初の巨人ユミルが、アース神族の祖と巨人族の祖を産み、アース神族の祖は、ユミルを殺すとともに人間を作った。アース神族は、善の形象であり、巨人族は、悪の形象である。最終戦争においてアース神族と巨人族は、世界とともに刺し違えて滅びて行く。ここで注意すべきなのは、人類の創始者であり庇護者であるアース神族が、巨人の血をひいているにもかかわらず、ユミルを殺していることである。

総じて巨人は、北欧の敵しい自然を象徴しているのである。季節に夏と冬があるように、自然には、人間を生み育む側面と人間を無残にも死に追いやる側面がある。ひとたび産み出された人間は、死に追いやろうとする自然を克服すべく、戦わなければならない。しかし、自然と戦い克服するということは、自然が人間の母胎である以上、人間自身にも破壊をもたらすことになる。このようにして自然も人間も一切がともに滅びるとするのが、ラグナロク神話なのである。

ここにあるのは、生きるという営みにおける絶望的矛盾なのである。人間は、生存を賭けて果敢に闘争したはてに、死に飲み込まれる。北欧神話において戦って負けること、死ぬことは、恥ではない。恥なのは、戦いから逃走することであり、死に背を向けることなのである。北欧神話は、生存することそれ自体がもって

いる絶望的矛盾を、積極的に受容するように古代北歐人に説き、生存にかかわる生死の問題を可能な限り先鋭化することによって、過酷な自然環境に生きる古代北歐人の知恵となったのである。

3. 結語

ドイツロマンティークと北歐ロマンティークにおける神話理解を比較すると、ドイツロマンティークにおいては有機的自然の欠乏感、デンマークロマンティークにおいては具体的自然環境に根づいた生活経験にもとづく絶望的矛盾の困難さが、きわだっている。

ドイツロマンティークにおける欠乏感は、ドイツ地域においてキリスト教化以後神話そのものが払拭されて喪失してしまったことに、起因しているだろう。神話は、故郷に密着して長いときをへてしだいに醸成されるものである。後期ドイツロマン派の神秘主義的傾向は、故郷喪失という事態において故郷を希求する典型的なあらわれなのであった。

北歐ロマンティークにおける絶望的矛盾は、故郷にすぐれて土着化した北歐神話の呪縛の底深さを示しているだろう。問題なのは、神話が総じてもっている運命論の呪縛を、いかに断ち切るか、これに尽きている。

ドイツロマンティークにおける神秘的傾向は、以後、思弁の道を歩むことになる。また、北歐ロマンティークにおける運命論の

呪縛は、以後、無関心に対する情熱という態度を、人々に植えつけていくことになる。ドイツロマンティークにおける思弁の道は、真に故郷を見出したとき、はじめて完了することになるのであり、北歐ロマンティークにおける無関心にたいする情熱という伶俐な態度は、運命論の呪縛を解いたとき、はじめて克服されることになるのであった。

- (1) S. 3 in *Band 1* in *Schellings Werke 1-6*, nach der Originalausgabe in neuer Anordnung herausgegeben von Manfred Schröter, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung München, 1979.
- (2) S. 366 in *Band 1* in *Novalis Schriften 1-5*, herausgegeben von Paul Kluckhohn und Richard Samuel, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart, 1977.
- (3) S. 368 in *Ibid.*
- (4) S. 35-36 in *Band 4* in *Novalis Schriften*, 1975.
- (5) S. 255 in *Band 3* in *Novalis Schriften*, 1983.
- (6) S. 69 in *Geschichte des Begriffes >Romantisch< in Deutschland*, von Richard Ullman & Gottard, Berlin, Verlag von Emil Eberling, 1927.
- (7) S. 113 in *Band 2* in *Novalis Schriften*, 1981.
- (8) S. 99 in *Band 1* in *Novalis Schriften*, 1977.
- (9) S. 33-34 in *Band 3* in *Friedrich Heinrich Jacobi Werke 1-6*, herausgegeben von Friedrich Roth & Friedrich Köppen, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1968.

- (10) S. 10 in *Etymologisches Wörterbuch der Deutschen Sprache*, von Friedrich Kluge, 21. unveränderte Auflage, 1975.
- (11) s. 52-54 i *Guldhornene*, af Vilh. Andersen, København, det nordiske Forlag, 1896.
- (12) s. 96 i *Henrik Steffens' Indledning til Forelæsninger i København 1803*, af Henrik Steffens, ny udgave ved B. T. Dahl, København & Kristiania, Gyldendalske Boghandel & Nordiske Forlag, 1905.
- (13) *Völuspá in Band 1 in Edda-Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern-1-2*, von Hans Kuhn, Heiderberg, Carl Winter, Universitätsverlag, 1983, 1968.
- (14) *Gylfaginning in Edda af Snorri Sturluson*, udgivet af Finnur Jónsson, København, Forlag af Universitetsboghandler & G. E. C. Gad, 1900.

(なかざと・たくみ・哲学、東洋大学非常勤講師)